

「もう、たくさんだ！」

クリスは日本語で叫び、書類の入ったバインダーをボタンと閉じた。その音が頑丈な石の壁に反響する。デスクの前から立ち上がると、はめ殺しの窓べに立った。

窓からは、小雨に濡れたセント・ポール大聖堂がソフトクリームのキャップのように、鉛色の空にそりたっているのが見える。すぐ目の下は、ロンドンの金融街、シティーだ。こうもり傘の陰鬱な花が開き、建ち並ぶ銀行や証券会社の間を制服のようなピンストライプのダークスーツを着けた男たちが縫っている。

そのてきばきとした、一切、わき目をふらぬ足どりを眺め、クリスは身震いした。

気温は摂氏十三度。部屋の中にはスチームが入っている。

六月。

日本でも雨は降っているかもしれない。だが指先が凍えるようなこんな冷たい雨ではない。傘だつて色とりどりの華やかな色で、V・G・S東京支社のある青山通りは、今頃カ

ラフルに染まっているだろう。そしてのびやかに歩く娘たち。

クリスはもう一度身震いした。テムズ川の水面を渡ってくる風に、傘を吹き飛ばされま

いとする紳士たちには、色といえは黒しかない。ついきのう、クリスはダンヒルにセーターを買いにいき、店員と喧嘩をやらかしたばかりだった。

カシミヤのセーターが欲しい、といったクリスに、氣どつた女店員は、

「もうサマーシーズンですので、カシミヤはおいてございません」と答えたのだ。

「サマーシーズン!? この寒さのどこがサマーシーズンだつていうんだ!? ミニスカートもタンクトップも、シヨートパンツも、この街のどこを捜したつてないじゃないか!」クリスはぼやいた。

第一、ロンドンには可愛い女の子がいなさすぎる。街で見かけるプラチナブロードの美人はすべて北欧系の娘たちばかりだ。そりゃあ、彼女たちと愛を語るのも楽しい。だが、スカンジナビアの娘たちは、あまりにもストレートすぎる。なんというか情感がない。

あつさりど、簡単に、スポーツのように。

クリスは日本の女の子が恋しかった。V・G・Sロンドン本社社長になって八カ月。初めのうちは秘書としてクリスの身の回りの世話を焼いてくれた榎原慶子も、トウキョウ

の両親があまりに寂しがるのと、ビザの期限切れが理由で、二カ月前に日本に帰ってしまっていた。

クリスの予想では、二人はこのロンドンで結ばれる筈だった。だが、大叔父、ゴードン・ウオーカー卿の引退に伴い（『危険を嫌う男』〈集英社文庫〉第七話「国籍のないスパイ」参照）、要人警護システム社（ベリー・インポータント・パースン・ガード・システム・カンパニー・リミテッド、略してV・G・S）の社長とその秘書となった二人を待っていたのは、膨大な量の仕事だった。来る日も来る日も、何十枚、何百枚という書類にサインし、ビジネスランチ、ビジネスディナーに明け暮れたのだ。

夜はへとへとになってフラットに帰り、ベッドにもぐりこむだけ、たまの休みも、世界各地の支社から送られてくる業務報告に目を通すだけで瞬くまに過ぎていく。

大叔父から、アラスカ赴任を種に脅かされることはなくなった。だが、自由も愛も笑いもすべてこのいまましい書類仕事に奪われてしまったのだ。

（こんな筈じゃなかったよ）

クリスは溜息をついた。老スパイグループ「サイクロプス」の陰謀の結果、ゴードン・ウオーカーは卿引退し、現在はケント州の田舎で、望むと望まざるにかかわらず、静かな余生を送っている。

クリスは、今一度、大叔父に復活してもらいたかった。大叔父が社長に復帰さえすれば、

自分はまた、この重苦しい灰色の街、ロンドンを離れ、可愛いお尻と頭の軽い娘たちが待つ母親の国、ニッポンに帰ることができるのだ。

だが大叔父にその気があるとしても、問題は残っていた。万一、大叔父が自分が引退せざるをえなくなった理由——一カ月間、突然口がきけなくなるという奇病、実はCIAが開発した薬品を飲まれた——を知ったら。そして、その仕掛けに、「サイクロプス」に説得されたクリスが加担していたことを知ったら。

クリスは三度目の身震いをした。アラスカどころの騒ぎではない。パチカンの修道院か、ガラガラ蛇以外は人っ子ひとりいない砂漠のまん中に送りこまれるにちがいない。

いや、もつとひどい。あの大叔父のことだ、仕返しにクリスにもとんでもない薬を飲ませ、病院に送りこもうと企てるだろう。

顔が何倍にもふくれあがるとか、男性機能を失うとか、おならがとまらなくなるとか。とにかく、一生を女の子とは無縁に送る羽目にさせられることはまちがいない。

クリス・ヨシオ・ウオーカー。大英帝国でも類いまれな、軍人、武人、冒険家を生みだした血統にありながら、唯一、危険を嫌い、平和と頹廢を好む、できそこない。ウオーカー家の恥、英国の面汚し、業界の珍種。

「ああ……」

クリスは呻いた。

（青春が終わる。僕の青春は、この灰色の牢獄のようなオフィスで過ぎていくんだ……）
デスクのインターホンが鳴った。

「はい」

「副社長のミスター・ヘミングスがお見えです」

秘書のミス・キャノンの声があった。

「通してくれ」

クリスはいった。ヘミングスは大叔父の右腕だった男で、クリスとはまる、で、合わない。元空軍特殊部隊SASの少佐で、勇猛、冷静、残忍、V・G・Sのエージェントの現場作業を統轄とうかくしている人物だ。

それでも、一分でも書類仕事から解放してくれる訪問者はすべて歓迎したいクリスだった。

ノックのあと、社長室のドアが開き、ヘミングスが姿を現わした。ずんぐりしていて胸板が厚く、首が短い。典型的な軍人タイプだ。頭の天辺てんぺんが禿はげていて、トイレで聞いた秘書たちの噂話うわさでは、香港支社のエージェントに中国製の毛生え薬の本物ほんぶつを入手するよう、厳しく命じているらしい。

入室したヘミングスは、ダークスーツよりも軍服が似合いそうな敬礼をした。

「ミスター・ウォーカー」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。